

図書館だより

北海学園大学附属図書館報 第27巻4号(通巻176号) 2006.1.11

vol.27

NO.4

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

土屋 博

2 図書館と博物館の間



高井信勝

おお かす

3 大数のはなし

佐藤克廣

4 図書館とわたし

越後 修

5 他大学の図書館も積極的に利用しよう

6 ホームページをリニューアルしました

7 レオナルド・ダ・ヴィンチ展

田中史人

8 本のココロ

編集後記

図書館と博物館の間

Library
Museum

文= 土屋 博
(つちや ひろし/人文学部教授)

先頃、関西のよく知られた歴史の古いキリスト教主義大学の図書館が、いわゆる「死海写本」(1947年以降、死海西北岸クムランの洞穴を中心に、次々と発見された一群の文書で、「クムラン文書」・「死海文書」とも呼ばれる)の小断片を購入した。価格は通常のセットもの高額図書の数倍に達した模様であるが、現物は手のひらにのってもなお余裕があるくらい大きさにすぎない。筆者も見せていただいたが、聖書の写本(のごく一部)だということで、文字らしきものがかろうじて確認できた。日本では、死海写本の現物を所有する大学はなく、これが貴重なものであることに疑いの余地はないが、その価値は、書かれている内容よりも、写本断片という「もの」それ自体にあると思われる。それは、考古学が扱う遺物等の骨董的価値に限りなく近く、博物館の収蔵物が有する価値と同じ種類のものであろう。

図書館と博物館は、教育基本法において、公民館等とともに、国および地方公共団体が設置すべき施設として列挙されており、さらに社会教育法では、「社会教育のための機関」と位置づけられている。したがってこれらは、相互に密接な関係をもつ類縁機関と考えられているのであり、その後文書館も法制化されてここに加えられる。図書館のひとつのあり方に大学図書館があるように、近年日本でも、大学博物館が注目されつつある。それを先導するものとして、1996年東京大学に、従来の総合研究資料館を改組する形で、総合研究博物館が発足した。ここでは、美術館をもとりこむような博物館の新しい可能性が探求されており(西野嘉章『大学博物館—理念と実践と将来と—』東京大学出版会、1996年参照)、さしあたり「デジタルミュージアム」の構築が進められている。また、開館記念特別展のテーマが「文字の歴史：記載・活字・活版」であったことから

も推測されるように、この博物館の今後の展開には、図書館のあり方に対する問いかけも含まれているのではないと思われる。

最近では、印刷された内容だけでなく、印刷の仕方や印刷物の形態等々を含めて、文字資料の多様なあり方が研究にさいして考慮されるようになり、人文・社会系の研究手法はきわめて多彩になってきた。また、文字資料だけでなく、絵図や映像も資料として用いられることになれば、方法の幅はさらに広がる。そう考えると、研究のための資料提供という面に限って言えば、図書館・博物館・文書館の役割は互に有機的に関連することにならざるをえないし、そうなることが望ましい。しかもこれらの機能は、研究の支援だけではなく、広い意味での社会教育をも含むわけであるから、事態はますます複雑になる。

こうした状況の中で検討すべき課題は、大学図書館をすべて同じような形にするのがよいかどうかということであろう。充実した図書館に加えて、博物館をも併設できる大学は決して多くない。ところが、大学図書館の中には、結果的に博物館収蔵物に準ずる機能を果たす図書が、それと意識されないままにねむっている。それらはいわゆる稀覯本や古い時代の特殊な資料で、どちらかと言えば、大学の格づけのために購入されたものである。人文・社会系の、特に外国語の一次資料は、つい最近にいたるまでの膨大な二次資料をふまえてはじめて使いこなせるものであるから、それができない場合には、単なるコレクションにすぎない。この種の資料はむしろ、国内の拠点に集められ、共同利用に供されるという方向で考えられるべきであろう。それぞれの大学で図書館に多くのことが期待されがちであるが、限られた予算に配慮すれば、個々の事情にそくして、可能なレベルでの充実が選択されなければならない。

大数の はなし

文=高井信勝

(たかい のぶかつ/工学部教授)

江戸時代初期1627年に吉田光由によって『塵劫記』という数学の名著が出版されています。これには、そろばんの四則演算の計算法から通貨、売買、測量など日常的問題が広く扱われており、多くの偽本がでるほどの人気のある著作でした。いわば、江戸期のベストセラーで、その後、幾度もの改訂を経て明治中期まで版を重ねています。その最初の章が「大数の名の事」で、これには大きな数の呼び名が記されています。それを十進指数表記と併せて記すとつぎようになります。

一、十、百、千、万、億(10⁸)、兆(10¹²)、京(10¹⁶)、垓(10²⁰)、杼(10²⁴)、穰(10²⁸)、溝(10³²)、澗(10³⁶)、正(10⁴⁰)、載(10⁴⁴)、極(10⁴⁸)、恒河沙(10⁵²)、阿僧祇(10⁵⁶)、那由他(10⁶⁰)、不可思議(10⁶⁴)、無量大数(10⁶⁸)

この「無量大数」にいたるまでの数の広がりとはたごとではありません。たとえば、いまの日本の国家予算はおよそ80兆円、国全体の借金が800兆円という巨額なものといわれますが、「無量大数」の大きさと比べると、まさに塵のごとくに感じられます。当然、江戸初期の経済活動でもそれほど大きな数が必要であったとは考えられません。それでは、光由は何を想定して「無量大数」にいたるまでの大きな数を必要にしたのか、という想いかられます。

大きなものといえば、いまもむかしも宇宙の広がりがあります。光由は天空の大きさを大きな数で表現しようと思ったのかもしれませんが。そこで、現代科学に基づいて宇宙の大きさを見積もってみましょう。宇宙の広がり大きさは、およそ150億光年といわれています。つまり1秒間に30万キロメートル進む光が150億年走った距離ですが、これはせいぜい1000杼メートル(10²⁷メートル)に過ぎません。ものの大きさの数値は、基準にする大きさが変わると別な値になります。基準を1メー

トルから原子の大きさであるオングストローム(10⁻⁸メートル)に変えてみますと、宇宙の大きさは10澗オングストローム(10³⁷オングストローム)ということになります。つまり、それは原子の大きさの10澗倍ということです。ということで宇宙の大きさをさえ「無量大数」のお世話になることはありません。

光由は、また、世界中の浜辺や砂漠にどれだけの砂粒があるかを考えたのでしょうか。この総数は簡単に見積もるわけにはいきませんので、代わりに地球全体の原子の数を見積もってみましょう。物理学にはアボガド口数という大きな定数があります。これは、12グラムの炭素に含まれる原子の個数で、およそ6×10²³の値です。つまり、およそ1杼程度の値です。地球の重さは6杼(6×10²⁴)キログラムほどですが、話を簡単にするためにこれがすべて炭素でできているとしましょう。すると、地球全体の原子の数は、アボガド口数の500杼倍(5×10²⁶倍)ということになり、この値は300極個(3×10⁵⁰個)です。この数は「無量大数」の100京分の1(10⁻¹⁸)程度ですから、そのかけらほどでもありません。まして地球上の砂粒の総数は押して然るべきです。

ところが、現代の通信の世界では、「無量大数」を遙かにこえる大きな数が使われています。いまではインターネットに乗って巨額なマネーが飛び交っています。その情報が少しでも漏れたり、書き換えられるようなことがあっては一大事です。そのために情報は第三者には理解できない形に暗号化され、正規の受信者だけが復号化できるようになっています。この暗号化と復号化に使用される鍵として長大な数が用いられています。たとえば、「無量大数」の3乗もの大きな数が鍵として使われます。この数は大きければ何でもよいというわけではありませんが、大きい数ほど安全なことが知られています。巨大な大数が現代の情報社会を防衛しているといえます。

図書館とわたし

文=佐藤克廣

(さとう かつひろ/法学部教授)

勤続25年目にして初めて図書館だよりからの原稿依頼を受けた。歴代の編集者は私のことをちゃんと見抜いていたのであろう。というのも、私は図書館で本を読んだり借りたりすることは好きではないからである。

幸いなことに私の母は本好きであった。85歳になる今も家事の合間に日がな一日文庫の小説を読みふけっている。その母は、それほど豊かではない暮らしの中でもたくさんの本を買って与えてくれた。小遣いはくれなかったが、2、3ヶ月に一度、本屋さんで欲しい本を一冊選ばせて買ってくれる。その本選びは今から思えば楽しみの一つだった。

中学生や高校生の頃には日本や世界の詩集、世界文学全集などを定期的を買ってくれた。そんなに買ってくれても読めないという、読まなくても本がその辺にあるのが大事なのだと今でも言う。

このように、新品の本を読める環境にあったため、読書は、本の装丁、新しい活字の匂い、誰もまだ触ったことのないページをめくる感覚、そういった目からくる単なる活字や絵の情報以外にも含めた、いわば全身感覚を刺激する楽しみとなってしまった。

小学生も高学年となれば、学校の図書室に入出入りすることもあったが、そこに並んでいる本は、装丁家が苦勞した表紙は無惨にはぎ取られ、無味乾燥な図書室所蔵印が押され、そして、私とは違った風にページをめくられ、無数の手あかがついてしまっている、単なる本の残骸でしかなかった。とても読書を楽しむ対象として受け入れられるものではなかった。そのため、図書室や図書館は、私にとっては本の墓場でしかなかった。たまにそうした本たちを扱うため図書室の本を眺めることがあっても、書棚から引き出して読むことはなかったし、まして借りて読むということもなかった。

母の乱買いの恩恵で、中学生で密かにハイネを愛読した。純粋農村地域の冬になるとスキーで学校に通う超弩

級田舎の男子中学生がハイネを読むなどというのは冒瀆かもしれない。高校生では、ヨーロッパの自然主義と日本文学の自然主義の違いをおぼろげながら察知し、日本文学は唾棄すべきものとして一切読まないことにした。そのくせ文学好きの同級生とは日本文学のくだらなさを巡ってよく論争していた。ロマン・ロラン、モーパッサン、アンドレ・ジイド、フロベールなどどちらかといえればフランス文学が性にあっていただようである。同じフランスでも、カミュはちょっと違った印象だった。そのほか、カフカ、ヘルマン・ヘッセ、ヘミングウェイ、D・H・ロレンスなどいろいろな作家に手を染めていた。ロシアものは性に合わないようであった。

さすがに、大学生になってからは日本の小説にも少しは触手を伸ばしてみた。生協で何気なく手にとった石川達三に魅せられて(たぶん『四十八歳の抵抗』!!)、第一回芥川賞受賞作家であるといったことも知らずに、文庫本をすべて手当たり次第に買って読んだりした。『蒼氓』が第一回芥川賞受賞作品であるというのはだいぶたってから知ったことである。私の生まれ故郷のほんの近くで生まれたことも知らなかったが、何かつながりがあるのかもしれない。そのほかにも筒井康隆や谷崎潤一郎に入れ込んだりしたこともあった。いずれにしても、本は図書館では借りない。書店で、しかもできるだけ新しい本を買って読んだ。

大学図書館を再認識したのは、レスブリッジ大学に交換教授で行ったときである。ほとんどすべてが開架式で、図書に限らず徹底して資料蒐集の機能を追求していた。本や読書を楽しむところではなく、情報センターなのである。しかし、果たして日本の図書館はそこまで徹底しているだろうか。

図書館は、私にとって専門雑誌や専門書を借りる情報センターにはなったが、本当に読みたい論文や専門書は図書館では借りないという習癖は未だに直っていない。

他大学の図書館も積極的に利用しよう

文＝越後 修

(えちご おさむ／経済学部講師)

わたしは、本を全く読まない子供だった。かなりの幼少期から、「ディズニープック」「幼稚園」「小学〇〇生」「学研」など多くの本を両親は買い与えてくれたが、見る(決して「読む」ではない)ところといえば、懸賞のページぐらいであったように思う。

小学生3年生のときだったと思うが、そんなわたしを見かねて、母は「本を10冊読んだら、ご褒美をあげるよ」と提案してきた。わたしは、褒美欲しさに、とにかく10冊眺めた(やはり「読んだ」ではない)。そのときは、充実感よりも、むしろ「もう本には無理やり接しなくてもいい」という、ある種の開放感を感じたものだ(ちなみに、褒美が与えられることは無かった)。

ところが不思議なことに、わたしは生活の大半が読書の時間である研究者という道を選択した。では、なぜ本を読むことが面白く思えるようになったのだろうか。本をほとんど読んだことのないわたしの高校時の国語の成績は壊滅的であり、おかげで大学入試にことごとく失敗した。結果、浪人生活を強いられたわけだが、そのときに何気に購入した一冊の古文の参考書を読むことで、本に対する考え方が一変したことを記憶している。その本では、古文の助動詞「べし」の意味は、『『すいかとめてよ』と記憶しよう!』という類のことが数多く書かれていた。悪くいえば、単なる「マニュアル本」なのだが、かなりコンパクトなサイズの本でありながら、内容としては(わたしにとっては)驚きの連発であった。まさに「目から鱗が落ちた」のであった。「本って、多くの新たな発見を読者に伝えてくれるんだなあ」と、そのときはじめて実感したのである。そうなると、次の段階では「この本を書いた著者は、他の著書でもきっとすごいことを述べているに違いない」とか、「同じことを他の著者はどのように説明しているのかな」という興味が湧いてくるようになった。

近年は工作上、学術書を読むことが多いのだが、一冊読みはじめると、その本の著者が書いた他の本を読もうと思ったり、著書内で引用された本(参考文献)を読んでさらに理解を深めようという気持ちが高まったりする。そしてその本を入手し、読み出すと、やはりその著者が執筆の際に使った本を読まずにはいれなくなるし、さらに他の本も……。ここまでくれば、本好きというより、すっかり病気になる。

そうすると、北海学園大学の図書館には所蔵されていない本を求めるケースが増え、周辺の大学の付属図書館にお邪魔することになる。わたしは学生生活を道外で過ごしたが、そこでは大学間の連携関係が十分に整備されておらず、他大学の図書館を利用するにも、その都度、紹介状を発効してもらわねばならなかった。それに対し、北海道内の大学間では共同利用の協定がきちんと締結されており、紹介状は一部をのぞき必要はない(ただし、参加大学の図書館を利用するには、利用館ごとに所定の手続き(学外者利用申請、学生証の提示等)をして、利用登録を行うことが必要となる)。この制度のおかげで、希望の本や論文が自由に読めるようになった。

研究書を必要とするのは、なにも大学の研究者だけではなく、学部生のみなさんの勉強にも、少なからず多くの本が必要となる。ゼミの学生が調べ物をしている様子を見ていると、本学の図書館に最適な本が所蔵されていないことがあるようだ。そうしたときには、この「大学図書館相互利用サービス」を積極的に利用することを勧めている。

わたしのゼミの学生だけではなく、本学の多くの学生がこの制度をうまく使って、知的好奇心をさらに高めてほしいと願っている。

ホームページを リニューアルしました

2005.11.1

Point1

図書館の最新情報が確認できる

利用者みなさんにいち早くお知らせしたい情報を「TOPICS」に掲載しています。「TOPICS」に掲載された情報についてより詳しい説明などがある場合は、「お知らせ」をクリックして表示される「開館情報」ページに掲載されます。「TOPICS」にリンクが貼られていますので併せてご覧ください。

Point2

今月の開館予定がすぐにわかる

当月分のカレンダーをトップページに表示したことで、開館予定が一目で確認できるようになりました。なお、「お知らせ」をクリックして表示される「開館情報」ページでは、前後の月を含めた3ヶ月分の予定も確認できます。

北海道大学附属図書館
Hokkaido-Gakuen University Library

12月の開館予定

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

● 休館日 ● 開館時間変更

0007225 北海道大学

北海道大学附属図書館
■ 本館(豊平校舎): 〒062-8605 札幌市豊平区豊平4丁目1-40 / TEL: (011)841-1161 (FAX: 011)824-9101
■ 工芸部図書室(山崎校舎): 〒064-0926 札幌市中央区南24条西1丁目1-1 / TEL: (011)841-1161 (FAX)

Point3

目的別に7つのメニューを表示

■ お知らせ

図書館の開館時間と各種サービス等の利用時間、3ヶ月分の開館予定カレンダーを確認できます。また、「TOPICS」に掲載された情報の詳細が掲載されることもあります。

■ 蔵書検索 (OPAC)

図書館に所蔵されている図書、雑誌等が検索できます。このメニューに含まれる「目録検索」と「新着検索」は、館内で利用できる蔵書検索(OPAC)と同様のものです。

■ 利用案内

図書館の全般的な利用方法(貸出・返却手続きの方法など)を、学内利用者向けと学外利用者向けに分けてわかりやすく記載しています。

■ 施設案内

館内(閲覧室・書庫)の配架構成と、フロアマップに基づいた各階(工学部図書室を含む)の施設等を紹介しています。

■ 図書館だより

「図書館だより」のオンライン版です。従来は冊子体のみだったので、部数が足りない場合や都合で大学に来られない人は読むことができませんでした。しかし、これからはそんな心配は要りません。

■ 電子情報サービス

現在のところ、学術文献データベース4タイトル、電子ジャーナル4タイトル、電子ジャーナル(トライアル)1タイトルの計9タイトルの電子情報サービスを用意しており、今後より一層の充実を検討しています。サービス内容に変更があった場合は、随時「TOPICS」にてご案内します。それぞれの利用方法は次ページで紹介しています。

■ リンク集

調査・研究の一助として役立つ82サイトをカテゴリ別に紹介しています。

学内関連機関(4)/他の図書館・研究機関、蔵書検索(18)/
図書の情報検索(13)/雑誌の情報検索(6)/新聞社・報道機関
(9)/その他(21)/サーチエンジン(11)



図書館内のPCブースにおいて、以下のデータベースが利用できます。

北海道新聞データベース

1988年7月1日以降、北海道新聞に掲載された記事全文を検索できます。また、2005年9月4日以降の記事をPDFファイル化した「切り抜きPDF」が利用できます。利用したいときは、サービス・カウンターにお申し出ください。

官報情報検索サービス（本館のみ）

官報（本紙、号外、政府調達公告版、資料版、目録）をインターネットで検索できるサービスです。昭和22年5月3日・日本国憲法施行日以降～当日発行分（当日分は午前11時以降に公開）までの官報が検索できます。利用したいときは、サービス・カウンターにお申し出ください。



学内のPC環境において、以下のデータベース、もしくは電子ジャーナルが利用できます。

CiNii

国立情報学研究所(NII)が提供している情報検索サービスです。雑誌や大学紀要などの記事・論文の検索ができます。また、電子図書館に採録されている学会誌と、各大学あるいはNIIが電子化した研究紀要の一部については本文を閲覧することができます。

EBSCOhost（エブスコ・ホスト）

外国雑誌論文全文データベースおよび抄録データベースを多数提供する電子ジャーナルです。本学ではその中から、「Academic Search Elite」(人文・社会・自然など幅広い分野の学術雑誌2,000誌以上の全文、及び3,400誌以上のIndex/Abstractsを収録)、「Business Source Premier」(経済・経営・ビジネス関連の雑誌を収録した全文データベースです。約7,200タイトルの出版物の全文、約8,000誌のIndex/Abstractsを収録)、「EconLit」(American Economics Association制作の経済学基本データベースです。1969年以降825,000件以上の情報をカバーしており、雑誌論文・書籍等から抄録等の書誌データを収録)、「Regional Business News」(地域経済・ビジネスに関する雑誌50誌以上の全文を収録)という4種類のデータベースが利用できます。



学内・学外のPC環境から、以下のデータベース、もしくは電子ジャーナルが利用できます。

OECD（経済協力開発機構）

1998年以降のOECDの図書と雑誌、ならびに関連する統計データをオンラインで利用できるサービスです。利用したいときは、開発研究所までお問い合わせください。

ProQuest

経営学関係のデータベースです。なお、学部生の利用は当面できません。

ロー・ライブラリー 基本サービス

法科大学院専用のデータベースです。法務研究科及び法学部教員と法務研究科所属の大学院生のみ利用できます。

「ロー・ライブラリー 基本サービス」のメニューのうち、「LEX/DBインターネット」(TKC法律情報データベース)と「法律時報文献月報検索 総合検索」については、図書館内のPCブースと判例演習室で誰でも利用することができます。

LexisNexis

世界最大級の法律関連データベースを保有し、世界各国の法令・判例・特許・法律関連文献などをオンラインで提供する電子ジャーナル「LexisNexis」の中から、これらの豊富な情報をwebベースで提供する、リーガル情報調査の最強ツール「lexis.com」が利用できます。最新のテクノロジーと充実したコンテンツの結合により、簡単な操作で必要な情報を即座に入手することが可能です。法律情報のソースを、画面をクリックしながら簡単に選択できるように構成されています。ニュース、会社情報、マーケティング情報なども併せて提供しています。利用したいときは、サービス・カウンターにお申し出ください。

図書展示企画 No.44

場所 図書館1F自由閲覧室

期間 平成17年12月1日～18年5月31日

Leonardo da Vinci | 「レオナルド・ダ・ヴィンチ バリ手稿:A~I、K~M 手稿」全12冊 他を展示中

レオナルド・ダ・ヴィンチ展 — 人類史上最も偉大な天才の予言～「バリ手稿」を観る —

手稿と呼ばれる手帳やノートには、天文学、解剖学、建築土木、自然探究などさまざまな分野の研究・観察記録が500年前の最先端メディア「紙」に美しいスケッチとともに書き込まれており、近代科学を先駆けるそれらの内容は「万能の天才」の評価を確立するものとなりました。(1452～1519)

「あの一、原稿まだですかあ」
出版社からの電話。編集担当者の催促の声。思えば、もう二年近く前の話だ。
今となつては、「よい思い出」かもしれない……
そのころ私は、自分の今まで書き溜めた原稿をまとめて、本を出版しようとしていた。もちろん、新たに書き下ろす原稿こそないが、それでも一冊の本として出版するのは、けっこうたいへんなのである。
「全体的に読者にわかりやすいようにストーリー性を持たせて加筆修正……」
「〇ページ以内におさめないと、その価格じゃ売れません！」
「何日までに原稿をいただかないと、とても指定日に出版は無理……」
などなど。出版社側からの心温まるかずかずの激励(?)。日常の仕事に加え、大きな心労が重なるのである。
そして、よーやくの思いでまとめ上げた原稿を提出する。だからといって、すぐに開放してくれる訳ではない。校正作業。これもまた、たいへん。
せっかくだから、隅々までチェックして間違いを探してやろうなんて考えると、
「あっ！ ここは、こうすればよかった……」
「ココの表現は、こっちのほーがいいかなあー」
などなどとめどないあり地獄に陥ってしまうのであった。で、ようやくその地獄のすり鉢から這い上がって、真っ赤になった原稿を提出すると、
「えっ!?こんなに修正するんすかあー！ 最初の原稿が、

完成原稿だと思ったのに……」と、すばらしいお褒め(?)の言葉をいただくことになる。
それでも、何回かの校正の後、編集担当者の地道なご尽力により、ようやく本として日の目を見る。
やはり、出来上がった自分の本を手取るのは、格別な思いがある。
そこには、自分自身の生活や、歴史が埋め込まれている。ああ、このときこんなことで悩んでいたとか、このときは子供の卒園式だったとか、奥さんに怒られて家を追い出されたとか(いや、さすがにそんなことは無かったが……)さまざまな思いが行間ににじみ出ている。もちろん、これは自分だけの思いなんだけど。
たぶん、どんな本も、作者のそのときの思い、生活、歴史から成り立っているのだろう。
本の中身の良し悪し、出来栄えなどとは違った、その本を創りあげる行為に対する思い。
それは、作者の個人的な思いなんだけど、でも本人にとっては、とても大切なもの。
そんなことを考えると、「本は粗末にできないなあ」と思う。
そして、自分の本は、できれば大切にしてほしいと願う。ただ、本を出版するのだから、多くの人に読んでほしい。そして、そのような親しまれる本を書くことが、やはり使命であり、自分自身の大きな目標なのだ。
次は、親しみやすい本をと思いつつ……
なかなか筆、いや、キーボードが進まない。これが、一番の問題？

編集後記

もういくつ寝るとお正月、一人過ごしは言わずもがなのタブーというものです。それでも一人で過ごす人、それなら二人で過ごす人、みんな揃って映画鑑賞はいかがでしょう。

先月、東京は阿佐ヶ谷の「ラピュタ」、飯田橋の「ギンレイホール」、下北沢の「シネマアートン」等々の名画座を訪ね歩く機会があったのですが、良い映画館がある街の趣深さにたまらない愛おしさを抱いてしまうのは私だけでしょうか。

数年前、惜しまれながら消えていった札幌の映画館たちを偲びつつ、今ある映画館の“アカルイミライ”を応援していきたいものです。総てはそう、私たちの構え方次第ですから。